



英語文化エッセイ

Essays on English Studies

日本英語文化学会

日本学術会議協力学術研究団体

# 英語文化エッセイ

No. 1

10 October 2023





映画情報：『飾窓の女』 (The Woman in the Window)

スタッフ--監督フリッツ・ラング/ 脚本ナナリー・ジョンソン/ 原作J・H・ウォリス作  
Once Off Guard/ 製作ナナリー・ジョンソン/

キャスト--リチャード・ウォンリー教授: エドワード・G・ロビンソン/ アリス・リード: ジョアン・ベネット/ フランク・レイラー検事: レイモンド・マッセイ/ マイケル・パークステイン  
博士: エドモンド・ブレオン/ ハイト(クラブのドアマン・ティム): ダン・デュリエ/ ジャク  
ソン検査官: トーマス・E・ジャクソン/ ウォンリー夫人: ドロシー・ピーターソン/ クロ  
ード・マザード: フランク・ハワード/クラブのクロード係チャーリー: アーサー・ロフト/ クラ  
ブの執事コリンズ: フランク・ドーソン/

公開：1944年(米国)、1953年(日本) /製作国：アメリカ合衆国/ 言語：英語/ 上映時間：99  
分/ モノクロ/製作会社：インターナショナル・ピクチャーズ / 配給：RKO ラジオピクチャ  
ーズ/ DVD 発売：ジュネス企画/



Photo: RKO

映画『飾窓の女』（*The Woman in the Window*,1944）は、妻子持ちの中年男性の隠された夢を暴く。

犯罪心理学が専門の大学准教授リチャード・ウォンリーは、妻と二人の子供を避暑に出した後、若さと冒険に縁遠くなった日常生活への倦怠を自覚する。幸せな家庭生活と安定した職業を得たウォンリーは幸せ者のはずだが、若さと活力を失っていく自分に苛立ちを覚え、変化を求めている。特に謎の美女に口説かれてみたい欲望に飢えていた。同じ思いを抱く40代のエリート男性たちとクラブへ向かう途中、ウォンリーはショウウィンドーに飾られたたぐいまれな美女の絵にみとれる。ウォンリーの熱い視線に気づいた仲間は、「彼女は夢の女、現実には存在しない」とからかうが、ウォンリーは美女のことが頭を離れない。仲間の夜の誘惑を断った堅物のウォンリーは、一人酒をやりながら聖書「ソロモンの雅歌」を読んでいるうちに、うとうとし出す。

夜10時半過ぎにクラブを出たウォンリーは、再び美女の絵の前に立っている。絵の後ろに謎の美女が見え、その当の美女が隣にいるではないか！ 驚くウォンリーにモデルの美女は、アリスと名のり、酒場へと誘う。夢見心地のウォンリーは、さらなる招待を断り切れずにアリスの自宅を深夜訪問する。ソファでくつろいでいるところにアリスの年配の情夫が出現し、嫉妬に狂ってウォンリーを絞め殺そうとする。とっさにアリスが手渡したハサミで情夫を殺害したウォンリーは、正当防衛を自覚しながら面倒を避けるために死体を始末する。

殺されたのは財界の大物のクロード・マザードであったため、マスメディアは騒ぎ立てる。疑心暗鬼に駆られたウォンリーは、仲間の刑事に同行して殺害現場に赴き、奇妙な言動を繰り返す。マザードの用心棒で元警官のハイトがアリスを脅迫したため、ウォンリーはアリスによるハイト毒殺計画を練るが気づかれて失敗する。追い詰められたウォンリーは服毒自殺をはかる。皮肉なことにハイトは警官に銃殺のうでで真犯人にされ、アリスはウォンリーに電話するが時はすでに遅かった。

ところがあわやというところで、ウォンリーはボーイの声で目が覚める。ウォンリーは元のソファに座っていた。美女アリスの誘惑にのった代価を払わされた悪夢から覚めたウォンリーは、ショウウィンドーで声をかける金髪美女から「冗談じゃない」と逃げ去る。

### 「夢の女」アリス

謎の美女アリスは、ファム・ファタール（運命の女）的悪女に見えるが、実は欲求不

満の中年男ウォンリーの欲望によって生み出された「夢の女」にすぎない。仲間の男たちの忠告通りアリスは実在しない美女なのに、月並みな容姿の妻に飽きたウォンリーは、浮気心と解放感からアリスを夢見る。したがってアリスは、ウォンリーの抑圧された自我の欲求、女に対する夢を象徴する。

アリスが悪女に見えるとしたら、それはウォンリーの魅力的で悪い女につかまっていたいじめられたいという倒錯の欲望の表れである。大学という堅い職場で犯罪心理学を教える模範的家庭人のウォンリーは、良き指導者、善人、正義の味方、良き父親という役目に息が詰まり圧迫感を感じていた。妻子の留守中にストレスは発散されて解消されなければならなかった。日常では聖書の「汝、殺すなかれ」の教えを説いて善を肯定し、学生や子供たちの上に立たねばならないウォンリーだからこそ、謎の美女に頼りにされたうえで踏みつけられる負の快楽を味わいたかった。アリスはウォンリーのマゾヒスティックな倒錯の欲望を満たすための受け皿として出現させられたと言える。

美しく、奔放でつかみどころのない夜の女アリスは、健全で疑うところのない、どっしりと構えた昼の女である妻とは対極のあやうい、つかみどころのない存在である。健全な日常に飽き飽きしていたウォンリーは、アリスの謎めいた危険な非日常性にあこがれ、翻弄されたい願望をもともと隠し持っていた。

### 「潜在的夢」とは

夢、特に睡眠中の夢の形態の一つである潜在的夢は「願望」を表し、「夢の中で幻覚的な形をとって充足される」（ライクロフト）。夢が表す充足のための願望は、ライクロフトによると「覚醒している自我には受け入れがたいので、検閲者を通過するためには偽装されなければならない」、「夢の機能は、そのままいたら夢見る人を途中で目覚めさせてしまうような願望を充足されたものとして表現することによって、睡眠を保つ点にある」、さらに「悪夢と不安な夢」は夢作業の失敗に当たり、夢の過程には、「圧縮、置き換え、象徴化、空間、時間というカテゴリーの忘却、矛盾の黙認」が存在する、「夢は圧縮された非論証的で視覚的な映像である」。

### 矛盾だらけのアリス周辺

アリスが夢であることは、アリスに関わることが矛盾だらけであることによって示唆される。窓越しに絵の中の人物の顔が絵の後ろに映るのが幻想的ならば、次の瞬間ウォンリーの隣に立って話しかけてくるというのも非現実的である。しかも特段金持ちでも

なさそうだし、風采が上がるわけでもない、何の変哲もない中年男にアリスのような高級志向の美女が興味を持つのは納得がいかない。嫉妬に狂ってウォンリーの首を絞めようとした有名人の中年男の本名をアリスが知らないのも妙である。週に3回尋ねてきて、宝石までプレゼントしてくれる男の囲われ者であるアリスが、行きずりの特に取り柄のないウォンリーの方に惚れているという設定も不思議である。

アリスは、ウォンリーの美女にもてたいという願望を映し出したとしか考えられない。准教授ウォンリーの心理学部長昇進の記事が顔写真入りで「ザ・タイムズ」誌に載り、それをアリスが見つけて騒ぐというのも変である。その程度のことが大きく取り上げられ、お目当ての美女が賞賛するとは考えにくいので、これもウォンリーの見栄の実現への夢であろう。

なにより奇妙なのは、飲み仲間の刑事にウォンリーが犯した殺人事件に関する余計なことをべらべらしゃべりまくり、死体遺棄現場に付き添って解説してしまう点である。罪の告解にも似た言動は、夢ならではの矛盾と危うさに満ちている。ライクロフトの夢の特徴「矛盾の黙認」を表すとしかいいようがない。「夢は圧縮された非論証的で視覚的な映像である」という特性を物語っている。

当初は、危険だが甘い夢であったはずのアリスにまつわる夢が「悪夢と不安な夢」に変貌したことによって、ウォンリーの夢作業は失敗の様相を呈する。「圧縮、置き換え、象徴化、空間、時間というカテゴリーの忘却、矛盾の黙認」という夢のコードを破って、偽装の域にとどまらなくなるウォンリーの夢を覚醒しつつあるウォンリーの自我が検閲して、悪夢として追い払う。偽装しきれなくなった夢は、ウォンリーの意識の覚醒によって「夢見る人を途中で目覚めさせてしまう」充足の喪失によって、夢本来の持ち場である闇へと葬られたのである。逆に夢の中の悪人ハイトがクラブの従業員チームであり、夢で活躍した他の従業員も目覚めたらクラブでいつもどおり働いていたというのも、夢ならではの歪曲、つまり「圧縮、置き換え、象徴化、空間、時間というカテゴリーの忘却」を示してコミカルである。

### 悪夢と美女の同時消滅

ウォンリーの目覚めによって謎の美女アリスも悪夢として姿を消す。しかしこれはアリスが悪女であったことを意味しない。アリスは「夢の女」としてウォンリーの脳が勝手に生み出したものだからである。アリスが絵の中の女であり、飾窓から外を眺める姿勢をとらされていたことにもウォンリーの検閲者としての自我が働いている。

アリスが飾窓の女とされることは、アリスが売春の形態をとる女であることを暗示する。既婚者であるウォンリーにとって素人女性との真剣な恋愛はインモラルであり、家庭崩壊を招く。商売女相手であれば世間的道徳的罪はより軽いという打算が無意識のうちに働いている。アリスは誘惑する女の常として、金髪ではなく黒髪である。飾窓の女アリスは、男性の欲望の鏡として存在するので、誘惑する女の基本のコードに従って生み出される。悪夢と化した夢から目覚めた後のウォンリーが近づいてくる女性を怖がって逃げたのは、自分の心の奥底に潜む欲望の破壊性を自覚して避けたのである。

### ハリウッド映画としての成功

ナサニエル・ホーソーン(Nathaniel Hawthorne)の「ヤング・グッドマン・ブラウン」(“Young Goodman Brown”)が森の中で自分の性的欲望の正体を知ってから陰鬱な人間嫌いになったように、ウォンリーも自分の欲望を誘惑する女のせいにして責任逃れしたといえる。ただし、ブラウン氏と違って、映画のウォンリー氏は、夢での苦い経験によって、より模範的な男として現実にかえることを示唆している。そういう印象を与えることがアメリカ映画界の自主規制ヘイズ・コード(1934~1968)によって元の自殺の結末を変更させられたこの映画の成果である。悪夢で終わらせなかった点が、この時代のハリウッド映画に温かみと明るさを加え、暗いテーマへの緩和剤となって一般観客に受け入れやすくした。外からの圧力による結末の大胆な改変が逆に「飾窓の女」の夢の要素を際立たせ、寓話としての特性を鮮やかに打ち出した名作に仕上げたのである。

### 参考資料

ライクロフト、チャールズ (Rycroft, Charles)。『精神分析学辞典』(A Critical Dictionary of Psychoanalysis) 山口泰司訳、「夢」の項目、東京：河出書房新社、1992年。  
ラング、フリッツ (Lang, Fritz) 監督。『飾窓の女』(The Woman in the Window)。  
エドワード・G・ロビンソン、ジョーン・ベネット出演、1944。ジュネス企画、2008、(DVD)。

©2023 J. Shimizu. All Rights Reserved. 1 August 2023

## ***Tar Baby* and Johnny and Associates -- the Crime of Innocence**

**Noboru Fukushima**

Valerian Street, the former president of “the Street Brothers Candy Company” (52), bought an island called “Isle des Chevaliers” (9)<sup>[1]</sup> in the Caribbean for next to nothing and seems to be living an elegant life in retirement with his wife, Margaret. There is a scene in which Valerian fires Gideon, the black handyman, and his wife Therese, the laundry woman, because they stole Valerian's apples. However, Sydney Childes, a black man who has been Valerian's butler for a long time, and his wife Ondine, the Street family cook, are upset because Valerian fired them without consulting the Childes, causing the two couples to fight violently. Valerian does not know why he is being blamed. Valerian does not understand that “Isle des Chevaliers” is a prison for Mr. and Mrs. Childs. Valerian and his wife, Margaret, seem to be living as if they are family with the Childs, but Valerian does not understand that his luxurious house, “L'Arbe de la Croix” (10), is a prison for Mr. and Mrs. Childs. The conflict between the Streets and the Childs escalates, and Margaret throws a cup at Ondine, so Ondine slaps Margaret in the face. Ondine finally loses her patience and says, “You white freak! You baby killer! I saw you!” (208) and reveals the incident of Margaret's abuse of Michael, the Street couple's only son. Valerian is rendered almost mute by the uproar, unable to say anything. Sydney knew about the abnormality of Ondine's refusal to let Margaret see her son. Sydney is guilty of abominable ignorance in turning a blind eye to his wife's abnormality. Ondine knew about the abuse and pretended to be unaware of it because she did not want to lose her good-paying job. The Childs value their daily lives more than racial/ethnic disparities. The Childs have no choice but to be subservient to Valerian in order to survive. Mr. and Mrs. Street are also stuck without Mr. and Mrs. Childs, who feed them and take care of their daily needs. It could be said that the two families are codependent. Ondine cannot escape the sin of innocence either. Valerian is stunned by this fiasco, learning of Margaret's abuse of Michael, and retreats to the greenhouse to ponder the crime of innocence:

... there was something so foul in that, something on the crime of innocence so revolting it paralyzed him [Valerian]. ... But had chosen not to know the real message that his son had mailed to him from underneath the sink. ... Was there anything so loathsome as a willfully innocent man? Hardly. An innocent man is a sin before God. (242-43)

Valerian remembers his son squatting in the laundry under the sink, Michael singing lonely songs



because he couldn't speak or cry, and he feels a heartbreaking pain. The lonely song Michael sent from under the washbasin represents the sin that Valerian committed. Valerian did not want to know the meaning of the message Michael was desperately trying to convey. By remaining ignorant of his wife's "abuse case," Valerian has protected himself from learning of Margaret's horrific acts against Michael: cutting him up, sticking needles in his buttocks, and burning him with cigarettes. Valerian is guilty of ignorance. It is not that he did not know, it is that he did not want to know. He is ashamed of his previous unknowns, wondering what could be more abhorrent than a man who is willfully ignorant, who refuses to know the truth of his abuse, turns away from his sins, and pretends to be oblivious. Valerian lays the blame for this incident solely on his wife, and the more he turns a blind eye to it, the more he criticizes himself for being selfish, for being inhuman, and for committing unforgivable crimes.

Valerian's charge of ignorance is reminiscent of the defense of Julie Keiko Fujishima, president of Johnny and Associates<sup>[2]</sup>. On May 14, 2023, she stated on television: "It's a story that can never be forgiven, but I didn't know,<sup>[3]</sup>" about the horrific sexual abuse case by the late Johnny Kitagawa. She stated unequivocally that she was unaware of the sexual abuse claims that the ambitious pop star had suffered for nearly 50 years. However, an investigative committee has found that the late Johnny Kitagawa abused "numerous" young men "extensively" from the 1950s through the 1970s, when Johnny and Associates was founded, and into the 2010s. There are two meanings to "I didn't know" both of which are impermissible. The first is when a person knows of a sexual abuse case but lies and says they did not know. The second is when one "truly does not know." However, Fujishima is the president of Johnny and Associates. In her position, not knowing about the incident cannot be overlooked as a dereliction of duty by the president. In March 2023, a chilling revelation was made to the public when the BBC aired a documentary on the sexual scandal committed by Johnny and Associates' late Johnny Kitagawa<sup>[4]</sup>. Fujishima probably decided she could no longer hide it and made an excuse.

To digress slightly, in 1853 Commodore Perry's Black Ship arrived at the port of Uraga in Kanagawa Prefecture. The arrival of the Black Ship meant that Japan, which had been closed to the outside world for more than 200 years, was opened up under external pressure. From then on, the Black Ship symbolized the end of national isolation. The late Johnny Kitagawa case was closed to the public for more than 50 years. Had the BBC -- the Black Ship -- not reported the incident, the Japanese media would have continued to sweep it under the rug. It turned out that the Japanese constitution had not changed at all. Think about the crime of innocence.

## Notes

[1] Toni Morrison, *Tar Baby* (1981. Alfred A. Knopf, 1993). All subsequent references are to this edition.

[2] Julie Keiko Fujishima resigned as president on Sep. 5, 2023. She will be succeeded by actor and TV personality Noriyuki Higashiyama.

[3] “President of Top Entertainment Agency Apologizes over Alleged Sexual Abuse by Late Founder,” *The Japan News*, 15 May 2023, <<https://japannews.yomiuri.co.jp/society/general-news/20230515-109776/>> [accessed 11 September 2023]

[4] This sex crime reporting recalls Jimmy Savile, one of the most infamous sexual predators in the UK because it has a lot of similarities. However, the BBC covered up a lot of things in that case.

## 研究ノート

### O.ヘンリーとニューヨークを舞台とした短編集における一考察

高橋 強

#### 1. O.ヘンリー(1862-1910) アメリカを代表する短編小説家

本名をウィリアム・シドニー・ポーター(William Sydney Porter)というアメリカの短編小説家は、9月11日、ノース・カロライナ州グリーンズバラに医者の子として生まれた。しかし母が死んだり父が家業を顧みなくなったりしたため、15歳から叔父のドラッグストアで働き、やがて1882年知人に誘われてテキサス州に移り、さまざまな職業を転々とする。25歳のとき19歳の女性と結婚。そのころから文筆生活にあこがれ始め、機会を得て週刊新聞『ローリング・ストーン』を発刊するがたちまち失敗、1896年、その2年前まで勤めたオハイオ銀行から横領罪で告訴される。この事件の真相はついに不明だが、結局彼はホンジュラスへ逃亡、放浪ののち、妻の危篤を知って1898年帰国して自首し、5年の刑を受ける。この服役中にこれまでの体験を素材に短編小説を書き始め、“Ohio Penitentiary”から取ったO.ヘンリーというペンネームで1899年『マクレアズ』誌に第一作が出る。これが縁で、模範囚として刑期を短縮されて1901年出獄するとニューヨークに出て作家生活に入り、一躍注目を集め、1903年『ニューヨーク・ワールド』紙と1編100ドル、1週1編の契約を結んでから3年間驚異的な活躍をする。中米での見聞に基づく『キャベツと王様』(“Cabbages and Kings,” 1904)、ニューヨークの庶民生活の哀歓を描いた『四百万』(“The Four Million,” 1906)など、ユーモアとペーソスに満ちた巧妙な筋(すじ)と、意外な結末をもった、O.ヘンリー独特の272の作品、13編の作品集を残した。O.ヘンリーは、過労と飲酒のため1910年6月5日、47歳で死去している。

## 2. 19世紀後半のニューヨーク

19世紀後半のニューヨークは、イギリスから独立し、自由になり、NYには多数の移民が入ってくる。19世紀半ばから後半にかけて産業と文明が発展し、前進する息吹（Go ahead to be alive）の時代に入る。1898年にはボストン、フィラデルフィアを抜き全米最大の都市になる。区画整理された街並みになり、5番街にはギリシャ・ローマ風建築の建物が並び、ブロードウェイにはミュージカル劇場やデパートができ、代表的なブロードウェイは、南北に24キロと長く延び、インディアンの馬車道街道をそのまま利用する。

## 3. 当時の移民について

1800年代の前半は、アイルランド人とドイツ人が、また1800年代の後半には、イタリア人と東欧ユダヤ人が大西洋を渡ってきた。19世紀の移民者のほとんどは、ローワー・イーストサイド（現在のチャイナタウンやリトルイタリー）の狭いテナメント（安アパート）に住んでおり、生活や職が安定したファミリーは、このローワー・イーストから北の地域や、イースト川の向こうのブルックリンに移り住んだ。この4つの民族にはともにアメリカ人として民族的にアメリカに同化していく者もいたが、ユダヤ人、イタリア人などは自身の文化や習慣を現在でも受け継ぎ、自分たちのコミュニティを引き継いでいる者も多数いる。この一世紀で、1800年にはわずか7万6千人だったニューヨークの人口は、337万人にまで膨れ上がった。アメリカへの移民は、史上最大の民族大移動であり、その入り口はニューヨークであった。

## 4. 人々の暮らしと文化

18世紀までは支配を受けていたイギリスの色彩が色濃かったニューヨークも、19世紀の新移民により、さまざまな色に彩られる。5番街を北に向かって富豪の豪邸が立ち並び、ブロードウェイ沿いにはファッショナブルなデパートが華を競い合うようになる一方で、貧困格差が広がったことも事実である。新しくアメリカに移民してきた欧州人のほとんどは貧困層であり、新天地でも底辺の暮らしは厳しいものだった。彼らは、ローワー・イースト（現在のチャイナタウン）の貧民街（ゲットーまたはスラム）のテナメント（安アパート）に居住し、土木工や、工場労働者、日雇い作業員として働く。失業、貧困、病気、犯罪など社会秩序を乱す人々の生活があったのも事実であった。

## 5. テナメント

移民者はローワー・イーストサイド（現在のチャイナタウンあたり）に最初に定住した。この地域は、ドイツ系、アイルランド系、イタリア系、ユダヤ系、中国系と移民時代の移り変わりとともに居住する民族が変化してきた区域である。ゲットーとも、スラ

ムとも呼ばれた区域で、住宅事情はおおむね劣悪であった。テナメントと呼ばれた 4、5 階建ての煉瓦造りの建物が住居となり、低賃金、失業、不衛生などの問題が常に関わりあう区域で、次々に訪れる移民者のため入居者は後を絶たず鯨詰の様相を呈していた。

## 6. 移民文化

文化生活は明らかにアッパー・クラス（裕福層）文化とローワー・クラス（貧困層）文化との 2 つに分かれ、アッパー・クラスは、オペラを好み Astor Place Opera House などを寄贈しパトロンとなる（現在のグリニッジ・ヴィレッジのブロードウェイ沿いあたりに多く建てられた）。また、庶民文化を代表した現在のミュージカルが多数上演された。当時は、貧しい移民の生活を題材とした内容で貧困層にとっては大切な娯楽となっていた。グリニッジ・ヴィレッジに著名な作家が移り住み芸術家村と呼ばれ始めたのもこの時期である。

## 7. O.ヘンリーの作品について

O.ヘンリーの短編小説は、彼の生涯にわたって移り住んだ各地を反映して、南部もの、西部もの、ラテンアメリカもの、ニューヨークものと、四つに分けられる。とくに 1903 年に『ニューヨーク・ワールド』紙と契約を結んでからの約 3 年間、日ごと夜ごとニューヨークの街を彷徨(ほうこう)しながら、O.ヘンリーは驚くべき多産ぶりを発揮した。そのほとんどがニューヨークものである。脂ののりきった時期の作品ということもあるが、まだ辻(つじ)馬車や市街電車の走っていたニューヨークを舞台に、庶民や移民たちの姿が生き生きと描かれ、ユーモアとウイットをきかせた筆致のなかから一種のペースが漂ってくる。なかでも、当時のニューヨークの人口数を題名にした作品集『四百万』(“The Four Million,” 1906) に傑作が多い。

### 7.1. ゴム族の喜劇 “A Comedy in Rubber”

ニューヨークはゴムの町である。誰一人ゴム族の視線から逃れることが出来ない。好奇心の塊のゴム族どもはハエが集まるように群がってくる。人の不幸を楽しんでいるかのような顔。ゴムのように人の不幸を楽しみ、幸福をうらやむようにゴムは如何様にも伸びるのである。ローワー・イーストサイドには大量の移民がうごめいていた。1902 年には今でも現存する三角形の高層ビルであるフラットアイアンビルが建築され、skyscraper なる言葉が生まれた。また当時移民や地方からの人々が首をゴムのように伸ばしてみることから rubberneck という言葉も生まれた。

### 7.2. 賢者の贈り物 “The Gift of the Magi”

クリスマスの前夜、貧しい妻デラは、夫ジムにクリスマスの贈り物ができないので、自慢の髪の毛を売って、夫の金時計にふさわしいプラチナの鎖を買う。ジムはその金時

計を売ってデラの髪に似合う櫛(くし)を買う。そして帰宅後、2人はそれぞれ自分の贈り物の対象がなくなっているのを知って呆然(ぼうぜん)とするという夫婦愛の物語であり、彼の作品中有名な一編である。一貫してニューヨークでの生活の苦しさをこの作品で表現しており、貧困に苦しむ夫婦愛が表現されている。

### 7.3. 警官と賛美歌 “The Cop and the Anthem”

ソープイーというホームレスは冬を刑務所で過ごそうとし、わざと逮捕されようと軽犯罪などいろいろ試みるが、いずれもうまくいかず、あきらめた彼が、東 29 丁目教会の賛美歌を聞き、まともな人間になり職を探して働こうとした瞬間に、浮浪罪で逮捕されてしまい3か月の刑を受ける。当時からニューヨークにはたくさんのホームレスがいて冬には暖をとるために刑務所に入りたいという者が多数いたことがうかがえる。ニューヨークに住む者の貧困層をテーマに自信をこの作品に投影している。筆者自身の葬儀はこの教会で執り行われた。

### 7.4. 最後の一葉 “The Last Leaf”

肺炎にかかり生死をさまよっている女性ジョンシーは、ローワー・イーストサイドのいわゆるプレイス(ゲットー)に住むが、向かいの壁の蔦(つた)の葉が散るのを見ながら、最後の1枚が散ったら自分も死ぬのだと信じている。ある風雨の激しい一夜のあと、葉が1枚だけ残っていたため、彼女は生きる勇気を取り戻す。それは、夜、雨にうたれた壁に蔦の葉を描いて死んだ、芽の出なかった老移民画家のベアマンの絵であった。この作品はニューヨークでの移民の儚さ苦しさを表現している。大都会ニューヨークで生きることの辛さを最後の一葉に込めている。

## 8. 芸術家が集うグリニッジ・ヴィレッジとは

今日でもグリニッジ・ヴィレッジは画家や音楽家などの芸術家がコミュニティーを形成している地区である。また、ニューヨークの中でも最も文化的な香りが高くハイセンスなエリアとして知られている。建物はレンガ造りで、パリなどのヨーロッパの街並みを思わせるような地域である。また瀟洒な店やレストランが並ぶ街並みは、ニュー Yorker にとっても憧れの存在である。この街の最大の特徴は、小さく細かい路地からなっていることであり、19世紀の街並みを彷彿とさせている。この街並は、19世紀から現代までのニューヨークの歴史そのものを表している。20世紀に入ると多くの文化人や芸術家たちが住むようになり、文学、芸術、音楽、演劇など豊かな文化が花を咲かせたのである。グリニッジ・ヴィレッジの代表的な通りであるグローブ・ストリートは、ゆるやかなカーブを描く短いストリートに、蔦の絡まるレンガ造りの家が並び、古き美しきニューヨークの街角といった様相を呈しており、大変ロマンティックな雰囲気を出している。また通りには、19世紀半ばに建てられた中庭に6軒のタウンハウスが並

ぶグローブ・コートという住宅群があり、ここが作家 O.ヘンリーの『最後の一葉』の舞台になった場所でもある。O.ヘンリーは、1902年からグローブ・コートに居を構え、1907年に出版された「最後の一葉」の舞台となったアパートは、作品と同じく、今でも壁に蔦が這っている。



ニューヨークのグリニッジ・ヴィレッジに現存する GROVE COURT の外観



GROVE COURT の中庭

## 9. テーマと筆致

O.ヘンリーは都市部に住んでいる人々に焦点をあてた作品を多く書いている。作品に登場する人々は財政面や社会的な面で何らかの苦難を抱えており、O.ヘンリーは都市に

住んでいる人々に共感を持っていたようだ。彼がよく知られている小説の構成として“surprise ending”が挙げられる。それは序盤では明かされない情報が結末で読者を驚かせるものである。O.ヘンリーが書き上げた作品はほとんどが語り手である第三者の視点で物語を展開していく。時に O.ヘンリー自身が語り手として作品内に登場することがあり、これを“Authorial intrusion”と呼ぶ。この作者の介入が行われるとき、作者と読者の間には何らかの価値観の共有が必要となる。同じ価値観を持っていることで読者を誘導しやすくなり、結末へと引き込みやすくなる効果が期待できるのである。O.ヘンリーの短編小説には、4つの要素が組み合わされている。1つ目は読者を引きつける出だしである。2つ目は最後の瞬間まで大切な情報を隠し通す語り手の存在。3つ目は機知や皮肉といった、人々を広く楽しませる論調。そして最後に慈悲深い悪者の存在である。これら4つの要素が O.ヘンリーの作品の代表的なものとして取り上げられているのである。

#### 参考文献

- O.ヘンリー。『オー・ヘンリー傑作選』大津栄一郎訳 岩波書店 1979年。  
――。『O・ヘンリー ニューヨーク小説集 [2]』青山南、戸山翻訳農場訳、筑摩書房 2022年。  
齊藤昇 『「最後の葉」はこうして生まれた』 角川書店 2005年。



#### 掲示板

##### I. <『英語文化エッセイ』投稿規定>

日本英語文化学会『英語文化エッセイ』は文学、文化、言語学、英語教育の各専門分野から幅広く投稿を求めています。〈研究ノート〉、〈書評〉、〈その他〉和文 2,000字、欧文 800語程度/

応募締切：2024年9月30日

応募先：日本英語文化学会『英語文化エッセイ』編集部編集長 清水純子

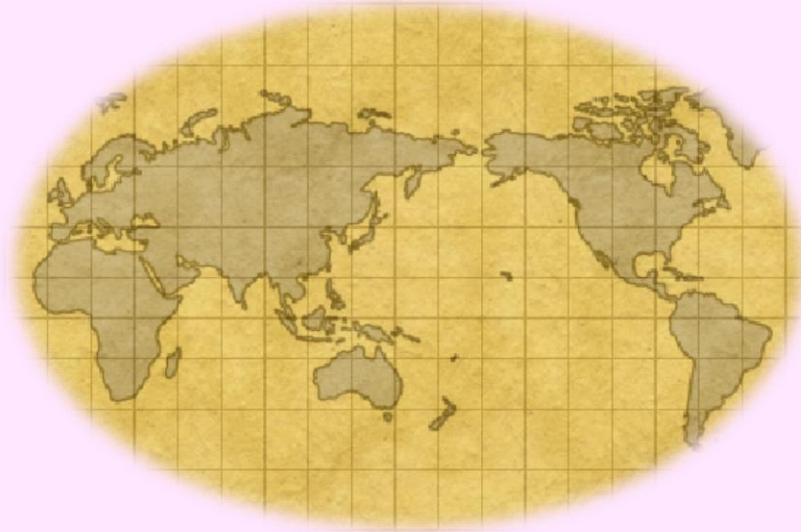
〒181-0005 東京都三鷹市中原 2-25-25 / tel: 0422-41-0029 / e-mail: [jesse@jcom.zaq.ne.jp](mailto:jesse@jcom.zaq.ne.jp)

応募方法：メール（Word形式の添付ファイル、テキスト形式の添付ファイル）

掲載の採否については編集部にご一任願います。

投稿原稿の用紙サイズ設定、行数文字数などページ設定に関しましては A4 用紙

Word 標準設定でお願いいたします。「メモ帳」等でテキストファイルに変換した原稿も添付してください。コラム等のレイアウトは編集部にご一任ください。



<<http://nihoneigobunka.jellybean.jp/>>

『英語文化エッセイ』は学会ホームページに掲載されます。デジタルファイル /PDF等は、アップデートができます。見落としや訂正がございましたらご連絡ください。

#### 編集後記

#### 『英語文化エッセイ』編集長 清水 純子

『英語文化エッセイ』は、日本英語文化学会会報 (*NewsLetter*) から本年 2023 年独立しました。NL (*NewsLetter*) は、2022 年に加入した J-Stage のために継続が必須ですが、エッセイを含んだ従来の NL は重く、作成の負担軽減が急務でした。NL の中心的中味であったエッセイは、新たなコーナーに『英語文化エッセイ』として継続し、生まれ変わりました。エッセイ掲載の要領は以前と同じです。『英語文化エッセイ』編集長は清水純子、編集補佐は松山博樹が務めます。引き続きよろしくお願いいたします。

今年の夏は猛暑でした。ここまで暑いと避暑地がほしくなりますが、山がある涼しげな所では熊の被害が後をたちません。頭数の増加と食料不足によって人間との共存が難しくなってきたことは事実で、放っておけない状況です。

熊の被害以上の騒動は、ジャニーズ事務所が性加害問題を放置し続けていたことでした。英国の BBC によって暴かれたスキャンダルですが、加害者の元社長はすでに亡くなっています。被害を受けたタレントの延べ数は想像を超えます。人間関係が成否の鍵を握る業界とはいえ、見て見ぬふりを決めこんでいた日本のマスメディア全体が非難されています。

ウクライナ戦争はやまず、コロナとインフルエンザは手を携えて勢力を伸ばしています。でも今年の十文字学園女子大学での全国大会は成功でした。興味深い発表の数々に



加えて、楽しく歓談し、懇親会ではおいしい料理を皆で味わうことができました。これからも快調が続くことを願ってやみません。



福島昇 撮影

編集: 日本英語文化学会 / 編集部: 清水純子 松山博樹 / 発行人: 中井延美

発行所: 〒279-8550 千葉県浦安市明海1 明海大学 管理研究棟 1718

中井延美研究室 日本英語文化学会 e-mail: [nnakai@meikai.ac.jp](mailto:nnakai@meikai.ac.jp)

2023年10月10日発行

# 日本英語文化学会

© 2023 The Japanese Association for English Studies